

アメリカの漢字表記「米国」の成立をめぐって

孫 建 軍

1. はじめに

外来文化が入ってくると、その文化の発祥地に関心を持つようになる。そしてその国の名前、つまり国名を知りたくなるものである。19世紀中頃、極東市場争奪のため西洋列強が東洋にやってきた。1853年の黒船来航は200年も鎖国していた日本に大きな衝撃を与えた。黒船に乗って来た「アメリカ」人、また「アメリカ」という国の本格的な研究は、その時点から始まったと言ってよいだろう。

ペリーが再び下田に来航した時(1854年1月)、日本はアメリカと日米和親条約(神奈川条約)を締結したが、日本の歴史上初の不平等条約と言われるこの条約で、アメリカは「亜墨利加合衆國」と表記されている。だが、今日の『広辞苑』第四版(新村出編・岩波書店1996年10月)をみると、アメリカについての説明は二つある。

アメリカ【America・亜米利加】

① 北アメリカと南アメリカの総称。② アメリカ合衆国の略。米國。

まずアメリカの漢字表記は「亜墨利加」ではなく「亜米利加」となっている。さらにこの「亜墨利加」が、今日の日本では「米國」と呼ばれるのが普通であることは誰も疑わない。しかし「米國」はいついつからアメリカを表すようになったのか。また、「英吉利」「仏蘭西」「独逸」「和蘭」「伊太利」のような西洋諸国の国名の漢字表記はいつ頃成立したのか明らかではない。

本論は17世紀から19世紀中頃までに発行された地理書、新聞、漂流記及び旅行記、辞書等の記述を調査し、西洋諸国の国名の漢字表記成立の歴史を、特に「米國」を中心に考察する。参考資料として、地理書は中国の漢訳洋書や、日本人識者による関係著書、オランダ風説書を用いた。新聞は『幕末明治新聞全集』と『日本初期新聞全集』を参考にした。漂流記は幕末の漂流民の回想録又は口書きなどから、アメリカ関係のものを対象とした。旅行記は、主として万延元年遣米使節の回想記などを手がかりとした。辞書は、単語集や、1810年刊行の『訳鍵』から『日本国語大辞典』まで、歴史的に影響の大きかったものを参考にした。

黒船来航は日本のアメリカ認識の節目だと考えられるので、本論はそれに対応して来航前後で分けて考察を進めていきたい。

2. 黒船来航以前の「亜墨利加」

日本人にとって、ペリーの来航は西洋との初めての接触ではなかった。16世紀にポルトガル人が鹿児島に上陸したのをはじめとして、スペイン人、イギリス人、オランダ人などが相次いで日本にやってきた。「亜墨利加」の認識も早くから知識階層に広まっていたようである。以下、前期漢訳洋書¹⁾、和蘭風説書及び蘭学者たちの諸作の中にあるアメリカ像を探っていきたい。

(1) 前期漢訳洋書

マテオ・リッチ(利瑪竇)の『坤輿萬國全圖』²⁾(1602年刊・明萬曆30)は西洋人宣教師が中国で作った最初の世界地図であった。やがてこの地図は日本にも伝わり、東洋人の世界地理に関する知識を一新させた。地図には「南亞墨利加州」「北亞墨利加州」等の地名表記がみられ、また「歐羅巴洲」には「諳厄利亞、拂郎察、意大里亚、以西把尼亚、波爾杜瓦爾」などの国が表記されている。1623年(明天啓3)に同じく宣教師であったアレニ(艾儒略)が著した『職方外紀』³⁾では、世界地理はもっと詳しく紹介されることになる。その巻二「歐羅巴総説」には⁴⁾、

共七十餘國其大者曰以西把尼亞曰拂郎察曰意大里亚…
西海則有諳厄利亞諸島…

との記述がある。また巻四「亞墨利加総説」では⁵⁾、

亞墨利加第四大州総名也地分南北…
北亞墨利加之西南有花地新拂郎察農地…

のように『坤輿萬國全圖』と同じ漢字表記を使っている。このような表記は清朝初期に中国へやって来た宣教師達にも受け継がれた。例えばフェルベースト(南懷仁)の『坤輿図説』⁶⁾(1674年・清康熙13)をみると、その国名表記は明末の宣教師が用いた方法そのままである。

一方、日本で最も早く西洋事情を世間に紹介した人物は、新井白石であろう。1714年(承徳4)に白石は『西洋紀聞』を著しているが、この本は彼の『采覧異言』(1713年・承徳3)とともに日本最初の西洋認識を記した著作であった。『西洋紀聞』上巻8頁には「萬國の圖」⁷⁾を利用したと書かれているが、それはマテオ・リッチの地図だと考証されている⁸⁾。中巻には「世界に五大州」を紹介した次の様な記述がある⁹⁾。

四つには、ノラルト・アメリカ、漢ゴツキアメツリキヤに北亞墨利加といふ

他にも拂郎機[フランキイ]、イタアリア、ポルトガル、イスパニヤなどのような外国の国名のカタカナ表記が早くもみられ、しかも現在の呼び方にかなり近い。この中で特に「イギリス」についての説明は注目に値する¹⁰⁾。

アンゲルア、アンゲリヤともいふ。イタリヤの語には、エンゲルタイラといひ、ヲ・ランド人は、インゲラントといふ。漢には、漢父刺亜とも譯す。又は諳厄利亜とも譯す。むかし、我國にて、インガラテイラとも、またゲレホロタンともいひ、俗にはイギリスといひしは、すなわちこれなり

このように「イギリス」という言い方が、日本で従来から俗称で使われていたことが窺える。

(2) 和蘭風説書

江戸幕府の鎖国政策(1639年・寛永16)断行以後長年にわたり、海外情勢の動向に関する知識は一般の日本人の耳目からほとんど閉め出されていた。ただ長崎一港のみに限って外国に開かれ、毎年中国・オランダ両国船の入港が公認されていた。

オランダ人以外によってもたらされる情報が主として東亜に関するものに限られていたのに対して、年々来朝するオランダ商館長は、幕府の要請に応じて世界各地の情報を当局に提出し、対日親善関係を維持するための一環とするのが恒例であった。これがいわゆる和蘭風説書である。それまで日本が得ていた世界知識の内容は、ある時点やある時期までのやや静止的な認識理解に停まっていたのに対して、風説書は時々刻々流動する世界各地の生の情報を、しかもその当時としては最も速く、毎年日本にもたらしたのであった。また、翻訳書類の作成も慎重・迅速に執り行われた¹¹⁾。鎖国時代を通じて和蘭風説書の持つ重要性は無視できない。日蘭學會、法政蘭學研究會共編の『和蘭風説書集成』(上下)は1641年の第一号から1857年までの風説書を収録しており、当時の日本のアメリカ認識を示す資料として格好のものである。

上巻の第一号から第十五号までは現代語文に訳されているので除外して、第十六号(1666年)から、「阿蘭陀國」以外の国名のカタカナ表記に注目し、それぞれの国の初出を並べると以下ようになる。

- | | | |
|------|-------|--|
| 1666 | 第十五号 | エゲレス國 |
| 1667 | 第二十二号 | 阿蘭陀國之隣國フランサと申國之者 |
| 1668 | 第二十三号 | イスパニヤと申國之守護に、女子壹人男子壹人御座候、姉娘をフランスと申國の守護に縁邊を相定申候 |
| 1669 | 第二十四号 | イタリヤ國の近所にカンデヤと申嶋御座候、 |
| 1676 | 第四十一号 | 阿蘭陀人とフランス人と今度軍仕候事、ドイツランドと申國之守護承 |

これらは『采覧異言』が書かれる1713年以前の記述であることから、『采覧異言』や『西洋紀聞』より前に西洋の国名のカタカナ表記は既にほぼ定着していたと考えられる。少なくとも当時の幕府の中では通用していたのであろう。

アメリカ関連の記述は、アメリカ合衆国独立の動きにあわせるかのように、風説書にもあらわれはじめるが、オランダの国家利益(イギリスとの戦争など)のためか、それほど多くは見られない。

- | | | |
|------|--------|--|
| 1757 | 第百六十二号 | 去年申上候通、フランス國とエゲレス國と争亂之儀、今以相止不申候、右之譯はアメリカ州之内エゲレス國に屬候地、先年奪取、其後和談之上差返置候處、去年又數拾艘之軍船… |
|------|--------|--|

- 1784 第百八十八号 去年申上候通フランス國・イスパンヤ國一致仕、エゲレス國と及合戦候末、
…此節平和相整候段
- 1798 第二百一号 其外歐羅巴諸州并アメリカ州不穩候段、追々咬啮吧表に申候越
- 1807 第二百十二号 去年ノワルドキユスト邊におみて日本船遭難風漂ひ居候を亞墨利加船見請、
右乗組之人々を相救ひ…
…貳艘之内壹艘アメリカ船借請渡來仕候
- 1809 「カピタン御隱密申上候横文字和解」に：但、亞墨利加者北亞墨利加州にて近來伊祇利須^{イギリス}12)人を
追討し獨立仕候に御座候、此國に再び伊祇利須より興軍の兆有之由に御座候、
- 1838 第二百四十六号 アメリカ國之内エゲレス國之配下カナタと申所之者共一揆
- 1839 第二百四十七号 去年申上候アメリカ洲之内エゲレス國之配下カナタ…
- 1848 第二百五十六号 去年御當地御送に相成候アメリカ人、三月朔日アメリカ州に向差申候

以上の記述では「アメリカ」というカタカナ表記は既に定着しているが、国名であるのか州名であるのかについて若干の混乱が見られる。一方「亞墨利加」という漢字表記は前期漢訳洋書の方法を踏襲している。注目すべきは上記の1809年の記述である。「カピタン御隱密申上候横文字和解」は風説書に代わる文書であった。この「亞墨利加」についての説明によって、アメリカが「国」だという認識がいよいよ明確になったと思われる。

(3) 蘭学者の「アメリカ」

江戸時代中期、新井白石の『西洋紀聞』や『采覧異言』などの諸作に啓発され、続いて将軍吉宗の洋書輸入制限の緩和が契機となり、蘭学研究の道が開かれ識者の海外知識は拡大していった。

蘭書の中で、アメリカ大陸の知識を一番詳しく紹介したのは地理学者山村才助の『訂正増譯采覧異言』（享和2年・1802）である。この書は、形式上は新井白石の『采覧異言』を増補訂正したものだが、量的には白石の原著の約10倍にも達している。巻頭には「西洋」「漢土」「本朝」計125部の「引用書目」をあげている¹³⁾。大量の資料を引用していることだけでもこの書の価値が窺える。卷之十二にはアメリカに関する記述がみられる¹⁴⁾。

北亞墨利加 蕃語ノワルト北也譯文取音與義耳昌永按ニ此洲羅甸呼テ「アメリカ・セプテンテリヨ・チアリス」ト云ヒ拂郎察呼テ「アメリケ・セプテンテリヨ・ナアレ」ト云ヒ和蘭呼テ「ノオールド・アメリカ」ト云フ「セプテンテリヨ」「ノオールド」共ニ北ヲ云ナリ。

このように当時はまだ依然としてアメリカを「亞墨利加」と表記していたらしい。この傾向に変化がみられるのは、6年後のフェートン号事件(文化5年・1808)以後のことである。この事件は幕府の鎖国体制を大きく揺るがし、西洋に関する最新知識を摂取することが絶対に必要となった。長崎通詞は幕府から英語の学習を命ぜられ、オランダ人が教授として雇われた。そして幕府の命により日本初の英語辞書『諳厄利亞語林大成』（文化11年・1814）が編集された。フェートン号事件発生から僅か6年後のことである。この辞書ではオランダ語の影響か、アメリカの発音は「エメリケ」になっている¹⁵⁾。

America エメリケ 亞墨利加 五大洲ノ一
England エンキレント 諳厄利亞國
English エンギリス 諳厄利亞アングリヤ
France フレンツ 拂朗察 国名
Holland 和蘭 国名
Spain イスパニヤ 伊斯把泥亞 国名

一方、このころ江戸で『諳厄利亞語林大成』より一足早く刊行されたオランダ語辞書『譯鍵』(文化5年・1810 藤林泰助編)には、アメリカは登録されていない。欧羅巴の国名は以下のようになっている¹⁶⁾。

ENGeland イギリス國
FRAnkryk フランス國
DUItfch ドイツノ
HOLland 和蘭陀
RUSland 魯西亜

これら二つの辞書をあわせてみると、当時はまだ前期漢訳洋書の国名表記が根強く影響を残していることがわかる。

だがこの頃から蘭学者たちは新たに漢訳された洋書にも目を向けるようになった。渡邊華山¹⁷⁾はマカオで活躍したイギリス人宣教師ロバート・モリソン (Robert Morrison) に注目しており、その著『慎機論』(1838年)でモリソンについて以下のように述べている¹⁸⁾。

莫里宋(もりそん)なる者は、英吉利斯國竜動の人にして、唐山広東の濠鏡澳の商館に留学する事、凡十六年、頗る唐山の学に通じ、予が見る所のもの、其著述尤も多し。五車韻府某年の刻にして、唐山の語を訳せるもの也。又読書雜抄一卷、千八百十七年の刻にして、周易・通鑑綱目・東華錄・西域碑文・地理志の類、皆洋字を以て訳するもの也。其為人英邁敏達にして、其國に於ては品級尤も高く、威勢盛なるよし、和蘭人往々称する事あるよし

モリソンは1815年から1822年まで *A Dictionary of Chinese Language* (『華英字典』)三部を編纂している。この辞書に代表される後期漢訳洋書¹⁹⁾が続々と日本に伝わり、原本だけでなく、おびただしい数の翻刻本・注訳本があらわれた。『華英字典』第三部は英華辞書になっており、冒頭の「英吉利國字語小引」ではアメリカを「米里堅」と表現している²⁰⁾。

英吉利國所用之音母切字乃羅馬國於古時所用之字且法蘭西國米里堅國波耳都其國等皆用的音母切字都同但連字成語不同所以其各國書話俱異也

ここには前期漢訳洋書の方式から一変して、「英吉利」「法蘭西」「米里堅」などの表記が現れている。この「米里堅」の漢字表記は1848年(安政4)蘭学者箕作阮甫の執筆した単語集『改正増補蛮語箋』²¹⁾にも利用され、「附録」の「萬國地名箋」には次のような記述がある。

佛蘭西 Frankryk フランクレイキ
意太里亜 Itaria イタリア
黄旗 Duitsland 即熱爾瑪尼亞 又獨逸
英吉利 Engeland エングランド

南北米里堅 Zuid en noord america ソイド エン ノールド アメリカ
 合衆國 Reenigde staaten ラルエーグデ スターテン

「合衆国」も「南北米里堅」の欄の中にあげられている。これは当時の中国人がアメリカを指すときに使った言い方であるが、早くも(少なくとも 1848 年以前に)日本に伝わっていたことがわかる。

箕作阮甫は、自然科学・医学・地理学などの多方面にわたってその名を知られている幕末の代表的蘭学者であるが、幕府の蕃書調所の教授方を務めた際に、漢訳洋書『海国図志』『瀛環志略』『聯邦志略』『地球説略』その他に訓点や補注を加えた和刻本の作成にも手を染めている²²⁾。1845 年(弘化 2)に箕作阮甫とその娘婿省吾は『坤輿図識』5 巻を刊行し²³⁾、次いで翌年の 1846 年(弘化 3)にはその補編『坤輿図識補』も世に問うた。その「北亞墨利加洲」の巻では、アメリカは「米里堅」のほかに「米利幹」とも表記され、振り仮名は「アメリカン」となっている。この「米利幹」の表記は後に漂流民の漂流記の中に多く見られ、当時かなり使用されていたと思われる。また「英吉利」「佛蘭西」なども見られるので、後期漢訳洋書の影響を受けたことが窺える。

以上、ここまで述べてきたアメリカの漢字表記を、年代順にまとめると、次の表のようになる。

年代	著者	書名	漢字表記	カタカナ表記
1622	アレニ	職方外紀	亞墨利加	
1715	新井白石	西洋紀聞	亞墨利加	アメリカ
1757		和蘭風説書		アメリカ
1799	森島中良	蛮語箋	亞墨利加	アメリカ
1802	山村才助	訂正増訳采覧異言	亞墨利加	アメリカ
1822	モリソン	華英字典	米里堅	
1839	渡邊華山	西洋事情書	亞墨利加	アメリカ
1846	箕作省吾	坤輿図識補	亞墨利加、米里幹、米里堅	アメリカン
1848	箕作阮甫	改正増補蛮語箋	亞墨利加、米里堅、合衆国	アメリカ

ここから、下記の二点が読み取れよう。

(1) 「アメリカ」「イギリス」「フランス」「ドイツ」「ポルトガル」などのように、西洋の国名は早くからカタカナで表記されていた。前期および後期の漢訳洋書の影響で、漢字表記は変化しても、カタカナでの読み方は定着していた。その中で「イギリス」のような俗な言い方も根強く残っていた。

(2) アメリカに関する知識は時代が下がるにつれて、アメリカ合衆国の独立に伴って、「大陸」から「国」へと認識が明確になった。日本は鎖国体制を保ちながらも、僅かのルートによって、意外に適確な海外情報を掴んでいたと言えよう。そして、現在アメリカを「米」と略称するように、「米里堅」や「米利幹」などの漢字表記は、後期漢訳洋書の影響を受けて地理

書や単語集に現れるようになった。一方「合衆国」²⁴⁾という呼称も、魏源の『海国図志』よりも早く、何らかの形で日本に伝わっていた。

3. 黒船来航以後の「米利堅」

1853年、ペリーの率いる黒船が浦賀に現れ、幕府はアメリカといよいよ直接対決の時を迎えた。やがて開国に追い込まると日本のアメリカ認識も本格化していった。

(1) 後期漢訳洋書

19世紀中頃に入ると西洋宣教師の中国における出版活動は勢いを増し、前節にふれたR・モリソンの『華英字典』をはじめ、さまざまな専門書、特に地理書が世間に広まった。1842年の阿片戦争の敗戦に屈辱を感じた魏源は『海国図志』を撰しているが、この世界地理書は中国人のアメリカに関する知識に大きな影響を与えた。この書は、Hugh Murray (中国名 慕瑞) による *Encyclopaedia of Geography, a Description of the Earth, Physical, Statistical, Civil and Political* (1834) の総論の部分、清末の両広(広東・広西)総督林則徐がアヘン戦争中の広東で中国語に翻訳させた『四州志』(50巻)を底本にしていると言われている。魏源は、この鈔本の『四州志』を底本として、それに歴代の史志、明以来の島志、西洋人の地誌地図によって増補を加え、1842年(清道光22)に50巻として揚州で刊行し、1849年(清道光29)には新資料を加えて60巻の重訂本とした。1852年(清咸豊2)には更にその後の新資料を加え、百巻本に増補し、これが定本となった。

黒船渡来直後(嘉永年間)に日本で出版された多数の和刻本や刻訳本は、殆どこの60巻本の重訂本に基づいている。だがこの書は天保禁書の令にふれた。1850年(嘉永3)に渡来した三部は、御禁制の文句があるとの廉で蔵囲いとなり、さらに1853年(嘉永6)に渡来した一部も、前回と同じ処分を受けた。しかし翌年には15部が舶載され、その内の御用部数を除いた8部が、買い請け商人の手を経て一般市場へ流出したと言われており²⁵⁾、嘉永・安政の頃に多くの志士や先覚者が、この書を外国知識摂取の最大の源泉として貪り読んだのであった。

この『海国図志』の中にはアメリカの呼称が数多く見られる。まず正式な国号である the United States (of America or North America) を中国訳したものには

合衆国 聯邦 聯邦国 美理格洲聯邦国 美国聯邦 大美聯邦 公儀同聯之邦
合省国 美理哥合省国 兼撰邦国 北米利加兼撰列邦 総撰部落 総理部落

等の種類がある²⁶⁾。また広東において星条旗の俗称を国名にかえたものには「花旗国」のほか、さまざまな当て字が使われている²⁷⁾。

美——美利哥 美利哥国 美理哥 美理哥国 亞美理哥 美理格 美国 大美
默——默利加 亞默利加 亞默国
墨——墨利加 亞墨利加 亞墨理駕
彌——彌利加 彌利堅

米——米利堅 米利加國

だが最も大きい影響を与えたものは、『海国図志』の百巻本にも収録されているが、福建巡撫徐繼畲が廈門駐在の折に、多数の西洋製世界地図を参考とし、「西国多聞の士」と言われていた雅裨理やその他の西洋人に直接質問して著述した世界地誌、『瀛環志略』（1848年・道光28）である。日本に輸入された時期は明らかでないが、1861年（文久元）に井上春洋・森荻園・三守柳圃共編の標点本が、阿波徳島の對媚閣から出版されている。この書の「巻九」にはアメリカが詳しく紹介されている²⁸⁾。

北亞墨利加米利堅合衆國 米利堅 米一作彌。即亞墨利加之轉音。或作美利哥。一稱亞墨理駕合衆國。又稱兼攝邦國。又稱聯邦國。西語曰奈育士迭（訓点に米利堅は「フルエーニブテスタ」、奈育士迭は「ユナイトステーツ」となっている——筆者注）

これらの書物の内容ばかりではなく、当て字の表記も前期漢訳洋書と同様に日本に受け入れられた。特に「米利堅」の表記は日本にかなり根強く定着した。この「米利堅」の呼称は中国では早くからあった。『清代外交史料嘉慶朝』によると、1805年（嘉慶10）の大臣による皇帝への上奏本の中に「咪喇哩」が見られる²⁹⁾。

到廣常通貿易者祇大小西洋嘆咭喇咪喇哩囉囉囉囉蘭晒及噠喘等國

このように漢字の前に口偏を付けるのは話し言葉に多いことは、上記の『華英字典』でR・モリソンによって指摘されている³⁰⁾。

ENGLISH nation, 英吉利國 Chinese commonly put a 口 at the side of each character to denote that the words are only used for sound; but it is an unnecessary addition. In the Chinese manner, the name may be abbreviated by using only the first word, and thus Great Britain be rendered by 大英國

ところで中国ではアメリカのことを「美国」と呼んでおり、これは現在でも通用している。この呼称は、米国マサチューセッツ出身のアメリカ公理会の宣教師ブリッジメン（儀来哲・高理文・裨治文 Elijah Coleman Bridgman, 1801-1861）が1838年（清道光18）に撰した『美理哥合省国志略』によるものである。1844年中国人志士梁廷枏は、この書物を底本に『合省國』（三巻）を出版しており、ここにアメリカの国名について、日本に大きな影響を与えた『瀛環志略』より詳細な説明が見られる³¹⁾。

粵人呼爲花旗者、以其入市船旗必繪彩花其上、俗遂指是名之。其自稱爲合省國、先系以亞墨理格洲、謂必如此、乃爲正名。蓋亞墨理格、即船主亞墨利哥之轉音。其曰亞麥利加者、加、格爲四声之通、亞麥即亞墨、利即理。譯語對音、本無定字也。曰米利堅者、米即亞墨合呼而急讀之則爲米、堅、加又復以轉而誤也。近年粵商、久于海外、操西洋土音、別呼之曰嘆哩呼、嘆與美無異声、而與亞墨同爲開口之音、又緣急呼至省。其曰哩呼、則明爲利堅之轉矣。曰合省國省者（亦稱合衆、或稱兼攝邦國、聯邦國、西語曰“育奈士迭”）、稱其國內所分之地爲省、前分後合、从質即以合名

ブリッジメンの『美理哥合省国志略』は、1846年（清道光26）に広東で再刊された。それ以降、書名が『聯邦志略』（大美聯邦志略）と改められた。この頃から中国ではアメリカのことを既に「美国」と呼んでいたと考えられる。『聯邦志略』は、日本では1864年（元治元）箕作阮

甫によって訓点が施され、江戸の老皂館から梓行されている。江戸の識者に愛読されていたようである。

また在華アメリカ人宣教師丁韋良 (William A. P. Martin) 訳の『万国公法』³²⁾ は、開国期の日本外交で重宝視された書物であるが、『聯邦志略』より一年遅れて和刻本が出され、ここにも「美国」がたくさん見られる。

この二つの書は幕末の日本に重大な影響を与えたのに反して、そこで使われていた新しいアメリカの漢字表記「美国」は日本では採用されなかった。日本に定着したアメリカの呼称が「米利堅」であったことは、黒船来航の衝撃がいかに大きなものであったかを窺わせるものといえよう。

(2) 漂流民の見た「メリケン」

『海国図志』などの漢訳洋書が大きな反響を呼ぶ以前に、日本は漂流民からもアメリカ情報を入手していた。アメリカの捕鯨船に救助され、囚らざるもアメリカを実際に目のあたりにしてきた漂流民たちのもたらした多様な情報は、いまだ鎖国政策下にあった日本にとって大きな役割を果たした。では、漂流民たちはアメリカをどのように表現したのであろう。

国禁を冒して日本に戻った漂流民の口書や漂流記などの中には、信憑性が疑われるものも少なくないが、アメリカ関係では、『時規物語』や『蕃談』は編者による考証や批判まで加えられ、整然と体系づけられた傑作であると評価されている³³⁾。『時規物語』は越中富山の漂流民の話を整理し、科学者の遠藤高環によって1849年(嘉永2)に編纂されたものであるが、その「卷之九」には「魯西亞」「亞墨利加」のことが収録され、その略称として「魯」「亞」となっている。また、「附り」に、「エギリス語はアメリカ語に同じと漂流民いへり」とある³⁴⁾。

一方、『蕃談』は『時規物語』と同じ事件を取り扱っており、富山藩の漂流民次郎吉の口述を、同じく1849年(嘉永2)に憂天生なる人物が手録したという形を取っている。この書には「米利堅」と「米利幹」の両方の表現が見られる。さらに、「米」は「米利堅」あるいは「米利幹」の略語として使われ、「米人」「英米」「米教」「米舶」「米刻」などが次のようにたくさん出ている³⁵⁾。

米利堅教ノ寺刹三字アリ。其尤近キ山頂ニ在者ニ詣ル。住持夫妻モ亦米人也
客等又米ノ豪商「ミツバラニ」ノ浮舗ニモ遊ヘリ
府ノ英米通事「トルマン」ハ即チ米産也
米英二國言語衣服毫モ爽ハス
「ワホー」ニテ米教ノ巨刹ヲ營セリ。工人石材渾テ米ヨリ輸ス
米英人ハ糖烟ヲ嗜ミ、之ヲ「メラシタバコ」ト名ク
「ボストン」ハ米多シテ、米國³⁶⁾トモ呼ベシ
凡ソ米英拂ノ三國ハ咸鱼ヲ痛禁ス
又米刻ノ缺蹄馬ノ圖ヲ觀タリ
米舶ニテハ豚ヲ豢スルニ、玉蜀黍ヲ用ユ

アメリカの略称を「米」としたのは、おそらくこの憂天生が初めてであっただろう。憂天生とは幕臣古賀謹一郎が、攘夷論がさかんだった時期に使用したペンネームである。古賀は伝家の漢学の力をもって蘭書を読み、西洋学に大変よく通じていた。開国思想の持ち主で、幕府の洋学所が蕃書調所となった時にはその初代頭取を務めた。「蕃談」聴取は彼が29才から30才の頃のことである。

『時規物語』と『蕃談』はあまり巷間に流布していないと言われている³⁷⁾。しかし、前者で用いられている「亜」は、後ほどの考察で分かるようにたくさん利用され、「亜国」でアメリカのことを指す傾向が長く続いた。それに対して後者の「米」という略称は、ごく僅かな書物で使われていたようである。その例として、漂流民の一人であり、日本の開国の歴史に名を残した中浜万次郎があげられる。

アメリカから帰還した万次郎は、長崎奉行所で徹底した取り調べを受け、1852年(嘉永5)7月にやっと故郷の土佐藩に帰った。彼のもたらしたアメリカ情報には幕府も世間にも大きな関心を寄せた。翌年の黒船来航を機に万次郎は幕府に登用され、やがて1860年の万延元年遣米使節団にも加わり、日米交渉史において欠くことのできない人物となった。

万次郎にまつわる漂流談は数多く残されているが、中でもアメリカの言葉に関する記述は印象的である。川田維鶴撰『漂異紀略』(1852年・嘉永5)の「凡例」には³⁸⁾

総て蛮名には、漢人の音訳したる文字あれども漂民の呼ぶものに合ざる者多し。故に皆片仮名を用ゆ中に就て、「シャアフチ」(振り漢字「散土徴私」—筆者注)「ノラスメリケ」(振り漢字「北米利幹」—筆者注)などの如く、何といへるは何々と漢訳するものなりと左傍へ仮名付の如くに漢字を附し、看官をして読易からしむる事を欲す。日本漢土(振り仮名「チャパンチャイン」—筆者注)等の類は漢字を用て之を写、左傍へ仮名を附、和漢になにといへるは彼になにと云へるなりと知らしむるのミ

とある。アメリカの漢字表記として、本文には「米利幹」があるとともに、「米利堅」も見られ、「合衆国」まで現れている³⁹⁾。

抑此大舶ハ「ノラスメリケ」「ユナイッスナイ」国「ヌーベッホー」(振り漢字はそれぞれ「北米利堅」「合衆」「新珀都高鳥」—筆者注)の捕鯨船にして、(後略)

ここにも「米利堅」「合衆国」が見られる。当時中国から渡った後期漢訳洋書は、既に幕府の官吏に活用されていたと言えよう。

一方、万次郎がアメリカを「メリケ」と呼んでいたことは他の本にも見られる。吉田正譽『漂客談奇』(1852年・嘉永5)巻之中の第三談には万次郎の「亞墨利幹詞」が記録されている⁴⁰⁾。

米利幹にて、天をヘブンと申候。地をガラアン、日をシャアンと申(中略)日本セツパン、米利幹メリケンと申候

亞墨利幹詞乾坤時候之部：亞墨利加(振り仮名「メリケ」「メリケン」—筆者注)

万次郎の使っていたこの「メリケン」は、黒船来航の時期と重ってたちまち世間に広まった。今でも「メリケン粉」「メリケン波止場」「メリケンサック」などのように「アメリカ」に代わる表現として広く用いられている。

万次郎は幕府の要請を受け「日本人による最初の刊本英会話集」⁴¹⁾である『英米対話捷徑』を執筆し、1859年(安政6)に刊行している。この書の本文には「米利堅」は出てこないが、タイトルから分かるように、「米利堅」の略語として「米」が使われている。だがこの「米」という略称はその頃まだ広く使われていなかったようである。

漂流民として言及しなければならないもう一人の人物は彦蔵である。播州濱田の漁夫の子彦蔵は、1836年(天保7)8月栄力丸に乗り組み、相州沖で台風に遭遇して漂流したが米船に救助された。後に米国に帰化してジョセフ・ヒコと改称し、9年後にハリスの通訳官として来日した。その一部始終を記録したものが1863年(文久3)の『漂流記』である。この書は『海国図志』の内容にもふれている。アメリカのことは「米利堅」、「亞米利加」と表現されているが、略称は「亞國」となっている⁴²⁾。

我を同伴して亞國の大都會なるワシントン府に行、
亞國の法として大頭領の替る時は、要路の役人僅に残り、其他は悉く退役して
英佛亞の如き強國の國にても法外のことあれば、
亞國と日本の両間に在て兩國の爲に微功を致し、國恩を報ぜんことを願ふばかりなり

とあるように、アメリカの通訳官として自分の国を「亜国」と称したのは、当時の日本がこの呼称を認めたとと言えるだろう。

一方、当時の日本人の目に映ったアメリカ人は、錦絵にたくさん描かれている。そのうちもっとも有名なものは「横浜絵」であろう。横浜絵は、幕末から明治にかけての文明開化期に最も華やかな存在であった横浜で生まれた色摺木版の異人画である。その図版の数々は当時の日本人に強烈な視覚的インパクトを与えた。しかし、明治以前の錦絵にはアメリカがカタカナで表記されているか、「亞墨利加」の漢字表記が多くみられ、「米国」は用いられていない⁴³⁾。

(3) 幕府の見た「亜国」

1854年(安政元)のアメリカとの和親条約締結以後、日本における「アメリカ」の漢字表記は変化を見せる。以下、幕末にアメリカとの間に結ばれた条約や万延元年遣米使節の旅行記、および幕府の開成所から刊行された官板からその変化の様子を見よう。

1. 対外条約

外務省編纂の『日本外交年表並主要文書 1840-1945 上』には、幕末からの主な対外条約などが収載されている。この書に出ている幕末のアメリカ関係の条約を年代順に列べると、正文に次のような表記が見られる⁴⁴⁾。

1854 亞墨利加合衆國 合衆國 亞墨利加船 亞墨利加人 (日米和親条約)
1857 亞米利加合衆國 亞米利加人 亞米利加船 (日米安政条約)
1857 合衆國 亞墨利加 (米總領事ハリス・堀田老中對和書抄)
1858 墨夷 (堀田老中亞米利加条約に關する沙汰書)
1858 亞米利加合衆國 合衆國 亞米利加人 (日米修好通商条約)

1859	亜墨利加	(五箇國と自由貿易許可の幕府布告)
1864	合衆國	(下ノ關事件取極書)
1866	亜米利加合衆國	(改稅約書)

条約の正文には通常俗称や略称などは使われないので、ここでははっきりした変化が見られない。ただ、アメリカの表現は「亜墨利加」から「亜米利加」へと変化する傾向がある。なお、条約名に「日米」の表現が出ているが、これは何れも条約を分かりやすく区別するため、後世の人が付けたものであって、条約調印の際にはこういった表現はなかったと考えられる。

2. 遣米使節旅行記

1860年(万延元)に、日本人として初めて、公式な遣米使節がアメリカに上陸した一行の滞在期間は56日ほどであったが、彼らの日記や回想記などからは当時の人々のアメリカ文明認識が窺える。『万延元年遣米使節史料集成』⁴⁵⁾『航米日録』⁴⁶⁾などの使節の日記をまとめると、「亜国」や「亜人」など、アメリカの略称を「亜」で表現しているのが目立つ。「米国」や「米人」なども出ているが、圧倒的に量が少ない。

作者	書名	使用表現
森田清行	亜行日記	亜国、亜人 米、米国
益頭尚俊	亜行航海日記	亜国、亜人 米人、米船
名村元度	亜行日記	亜国、亜人
日高為善	米行日誌	亜国、亜墨利加、亜人、亜里
水野正信	二夜語	亜国、亜士、亜医、亜人、亜里 米人、米国
新見正興	亜行詠	亜国
野々村忠實	航海日録	亜人、亜ノ士官 米人
福島義言	花旗航海日誌	亜国、亜人
木村喜毅	奉使米利堅紀行	亜国、亜人
赤松大三郎	亜墨利加行航海日記	亜国、亜人
長尾幸作	亜行日記鴻毛魁耳	亜人、亜将棋
長尾浩策	亜行記録	亜国、英亜ノ学
石川政太郎	安政七年日記	悪米理賀
嘉八	墨国の言の葉	亜国、亜人
玉蟲誼	航海日録	亜里、亜名 米人
斎藤留蔵	亜行新書	亜人、亜行

このように遣米使節たちの日記や回想記のタイトルには「亜」が非常に多く用いられている。「米人」や「米国」が使われたとしても、それは「亜人」「亜国」との併用であり、量的にもはるかに少ない。

遣米使節たちは出発の際、蕃書調所から英蘭対訳字書を借り出している。新見豊前守らの通詞であった名村五八郎・立石得十郎は「蘭書拝借願書」を提出している。ここにも「亜国」が

みられる⁴⁷⁾。

一ボンボフ英蘭対訳字書 老部式冊

右ハ私共此度亜國御用被仰付候ニ付テハ、書面字書、蕃書調所御蔵本之内拝借仕、御用弁之為、彼地江持越申度、此段奉願候

また、遣米使節団にも加わり、後に遣欧使節にもなった啓蒙思想家福沢諭吉も、「亜米利加合衆国」を紹介するとき、「亜」という略称を使っていた。1866年(慶応2)に刊行された『西洋事情』には「亜」が随所に見られる⁴⁸⁾。

余、頃日、英亜開版の歴史地理誌數本を閲し (卷之一「小引」)

英亜の一「ポンド」は我二百十一匁強に當る (卷之一「附録」)

英亜の一「フート」は我一尺強に當る (卷之一「附録」)

本編は専ら英亜の書を翻譯せるが故に度量皆兩國の制を用ゆ (卷之一)

亜人之人に堪へず、遂に八百十二年大統領マヂソン在職のときに至て兵を擧て英國と戦い… (卷之二)

英亜兩政府の不和を生じて殆ど戰爭に及んとせり (卷之二)

3. 開成所の和刻本⁴⁹⁾

開成所は幕府の翻訳センターとして、海外の情報の受け入れ、また世間への広報を一手に行っていた場所であった。1855年(安政2)に洋学所の名で発足し、蕃書調所・洋書調所と名称が変遷し、開成所と呼ばれたのは1863年(文久3)のことである。頭取の古賀謹一郎をはじめ、箕作阮甫・村上英俊・柳河春三・西周など、日本の開国の歴史に残る当代の有名な洋学者のほとんどが集い活躍していた。

開成所は開国政策の実施に伴い、新しい海外知識の需要にこたえて、「海外各国の変革記載致候新聞の書」として刪定本を翻刻した。その例として1857年～1858年の『官板六合叢談』(安政4年1月～5年5月)と1858年～1860年『官板中外新報』(安政5年10月～万延元年9月)を挙げよう。これら二つの官板はいずれも漢文なので、アメリカの呼称の特色が見られない。だが1860年(万延元)の遣米使節団に関する情報をイギリスやアメリカの新聞から「抜訳」あるいは「抄訳」した文書が注目される。『官板中外新報』第九巻に収録されている『亜墨利加新聞紙抜譯』の中に「合衆國」という表現が見られる。また第十一巻収録の「倫敦新聞紙抄譯」の「日本使節華盛頓二至ル」の記事にはアメリカに関する多彩な表現が見られる。「合衆國」「花旗」のほかに⁵⁰⁾、

米利堅及日本旗章ノ間ヨリ上岸シ

米利幹人ノ日本人ヲ評スル、実異見ナシ

条約ニ押印、使節ノ本任ヲ終ルニ、紐育等米利堅ノ諸邑ヲ巡歴シ、遂ニ去テ日本ニ帰ルヘシ。

千八百六十年六月十六日所出米利堅新聞紙抄譯

とあるように、「米利堅」がたくさん使われている。

1862年(文久2)正月発行の『官板バタビヤ新聞』は近代文化の先端をいく新聞史上の第一ページを飾るものと言われている⁵¹⁾。この新聞は蘭字新聞から翻訳した記事と載せると同時に、

日本国内の情勢をも送り出した。同年8月に『官板海外新聞』と改題されている。この中には「亜」が頻出している⁵²⁾。

倫敦新聞中に云ふ、或る英人亞國に行き、其分裂之由を探索し（巻九）
當今英國にて亞國の水綿中品の價（巻十三）
英國は亞國の戦争に因て災難を受け（巻十三）
亞人が旅館の柵を破り、既に入來ると見しが（巻二十三）
亞國夫人の如く前大君の寡婦は右進上したる縫道具を玩りと（官板海外新聞別集上巻）

文久年間に刊行された官板としては他に『官板玉石志林』も挙げられる。ここには箕作阮甫によって蘭語から翻訳された記事が掲載されている。自著『改正増補蛮語箋』で用いたためか、箕作はアメリカを「米里堅」で表現している(巻之一)。また巻之四では「彌」という略称を使っている。「米里堅」も「彌利堅」も、前述のように中国で使われていた表現である。ここにも後期漢訳洋書の影響が窺える。だがこれらの表現に比べて一番多いのは、やはり「亜」である⁵³⁾。

アメリカ ボストン
北彌利堅摩士頓
北彌を以て、自立合衆國と爲す
亞國に於て、殊に體認すべき者ハ（後略）
西亞及び中亞の庭園を好む人
亞人は、人に自在を得せしめ、益々學問及び禮法を弘めんとす。
亞の婦人、傳舎に逗留するには、常に美麗なる服を著す。

以上の考察から次の様なことがいえよう。アメリカの漢字表記は「亜墨利加」から「亜米利加」や「米里堅」へと変わる傾向が見られ、これは後期漢訳洋書が影響を及ぼしたと考えられる。「米里堅」の表記は数多く見られ、漂流民、特に中浜万次郎という歴史上特殊な人物が使っていた「メリケン」という表現は、ちょうど黒船来航の時期と重なって一般に広まり、現在に及んでいる。アメリカの略称に関しては、「亜」「彌」「米」が見られ、これも後期漢訳洋書が影響している。このような時流の中で、幕臣で洋学者の古賀謹一郎が、「米里堅」が広く使われるようになる以前に既に「米」という略称を使っていたことは注目される。この当時「米国」の使用例は僅かに見られるが、定着する傾向は見られない。幕府は「亜国」「亜人」「西亜」「中亜」などのように、「亜」と略称することが圧倒的に多かったようである。そしてこの後、「亜」は維新直前まで一貫して定着傾向を見せていくのである。では今日の「米国」はいかにして日本に定着し、「亜」はなぜすたれてしまったのだろうか。次節ではこの問題について考察する。

4. 「米国」の成立

(1) 語彙集の略語

1857年(安政4)に蕃書調所の村上英俊は英語の語彙集、『英語箋』を刊行している。この書のタイトルには「一名米語箋」とある。同じ年に、彼は『三語便覧』を出版しているが、そ

の「凡例」には「米」が使われている⁵⁴⁾。

學者闇記英語。則讀米籍亦不甚難。是無他。米因學英語故也。學者欲讀米籍。則諳記于英語。斯為捷徑。

村上英俊は、日本仏学の祖とされるなど、幕末の洋学者の中でも功績の多かった人物である。彼が「米」という略称を用いたのは、上司の古賀謹一郎の影響であろうか。また前節でも触れたように、中浜万次郎が『英米対話捷徑』（1859年・安政6）で「米」を使っている。このように開成所のメンバーの中でも、アメリカの略称は「亜」や「米」などのように、使い方が統一されていなかったことが分かる。それぞれの間でアメリカ認識にずれがあったことが、このような角度からも窺えよう。福沢諭吉はアメリカから持ち帰った中国人陳紫庭の『華英通語』を自ら増訂し、1860年（万延元）に発行しているが、その中には広東で用いられていた通称の「花旗」が見られる。また同じ年に清水卯三郎訳『ゑんぎりしことば』が刊行されている。この「実用英学書」は1864年（元治元）に『英米通語』と改題され、「隠れた明治文化の貢献者」と言われている⁵⁵⁾。

1867年（慶應3）柳河春三の『洋学指針英学部』が刊行されたが、この書は通俗英学書の一つの源となり、版を重ねている。その「序」には、

英吉利及ヒ米利堅ノ書ヲ讀マント欲セバ。先ヅ此書ノ卷首ナル廿六字ノ書体ヲ諳ジ。次ニ字音ヲ暗記シ。

とある。「米利堅」に「メリケン」と仮名を振ったのはおそらく中浜万次郎の影響であろう。この書が巷間に広く流布したことがきっかけとなって、「米利堅」の表現も広まり、アメリカをさす語に定着していったと思われる。そのように単語集や学習書においては、時代が下がるにつれて、「米」に定着する傾向を見せている。

しかし、当時の新聞、特に江戸や横浜で発行されていた新聞では、「亜」が依然として多用されていたようである。

(2) 新聞における「米国」

前節でふれたように、日本で最初に現れた新聞『官板バタバヤ新聞』と『官板海外新聞』はほとんどの訓点つきの漢文なので、略語の特色が見られなかった。英字新聞はこれらの新聞より1年早く、1861年（文久元）に長崎で *The Nagasaki Shipping List and Advertiser* が発行されている。その後、*The Japan Herald* が横浜で創刊されるなど、横浜を中心に外字新聞が次々と登場した。*Japan Commercial News* や *Japan Times* などは廃刊になってもまた別名で再刊している。日本の初期の新聞はこれら英字新聞中の記事を抄訳したものが主な内容となっている。

『幕末明治新聞全集』は明治文化研究会のメンバーが長年にわたって、日本初期新聞を収集、整理して編纂したもので、六巻八冊からなり、約25種類の新聞が収録されている。この中にみられるアメリカ関係の記事は、「亞墨利加」「亞米利加」「米利堅」「アメリカ」など表記が

様々であるが、ここでは略称を使ったものだけを考察の対象として、各新聞についての「解題」を交えながら表記の変化について考察していきたい。

1. 『日本貿易新聞』と『日本新聞』

『日本貿易新聞』『日本新聞』等会訳社による手書新聞の内容はすべて英字新聞 *Japan Commercial News* や *Japan Times* の抄訳である。その目的について尾佐竹猛は「解題」で次のように述べている⁵⁶⁾。

幕末内外多端に際し、ニュースの必要は痛感せられたが、当時は国内割拠交通不便を極め、勿論新聞雑誌の発行などもなく、単なる流言飛語や、道聴塗説に惑わされるのみであったが、この際幸いなことには、外人発行の新聞ができたことであった

この新聞の翻訳者は、柳河春三、箕作麟祥、黒沢孫四郎、堀達之助、加藤弘之等、蕃書調所(洋書調所、開成所)のメンバーであった。彼等によって会訳社は結成されている。彼等の内で最も翻訳量が多く、新聞全般にわたる校閲・補正を行っていたのは柳河春三であった。会訳社からは後に西洋雑誌、中外新聞が発行され、「日本新聞文化の苗圃」と評されるようになるのである⁵⁷⁾。

まず『日本貿易新聞』を見てみよう。この新聞は、1863年(文久3)に開成所から発行されている。これには、「亜」がたくさん見られる(なお、巻数・頁数は『幕末明治新聞全集』全六巻による、以下同じ)。

亞人今ハ心安しと安堵の思をなし、速ニ此処を退帆せり (巻一、18 頁)

神奈川に聞ゆるや否亞國軍艦ワヨミン (巻一、18 頁)

亞艦貳隻佛艦壹隻を (巻一、20 頁)

日本政府より西洋各国及び亞國へ餘事に託して施設を送らるへき (巻一、79 頁)

直に亞國蘭國の公使、右談判の意を其同僚に傳通し (巻一、100 頁)

此亞國新聞紙中に記載せる条々ハ (巻一、107 頁)

例の如く日本役人等亞國のミニストルと應接するを避け (巻一、145 頁)

先日亞國の兵士使節館へ歸路の時 (巻一、146 頁)

亞國ミニストル會てシヤメスウンと号する軍艦にて江戸に行きしに (巻一、151 頁)

出帆船號表 英、佛、蘭、魯、亞 (巻一、159 頁)

全く英佛亞蘭の合衆軍隊となりて働かんが為に來りし (巻一、216 頁)

亞國南北和睦の風説に由りて (巻一、263 頁)

それに対して、「米」は3カ所しか使われておらず、あまり一般的に定着していなかったようである。

若しリブルプール英國の有名なる大港に在る佛米の舟人、皆其都府役人の支配を受る事なく (巻一、186 頁)

英佛米蘭の軍艦及び神奈川の港より… (巻一、232 頁)

君彼れに代りて米のミニストルプリユイン及び佛の… (巻一、232 頁)

Japan Commercial News は2年後に廃刊となり、それに伴って『日本貿易新聞』も一旦消え

てしまった。それに変わって発行されたのは *Japan Times* である。『日本新聞』はそれをテキストとして、1865年(慶応元)から発行されている。

日本と条約を取結ひたる英佛亞蘭四ヶ國の全權大臣等、(巻一、357頁)

横濱入津船号表 英船、法船、荷船、亞船、(巻一、374頁)

亞國欽差乗込 (巻一、383頁)

亞國大統領ジョンソンは、(巻一、424頁)

英亞兩國の人民、漸く其國の事情を解し、(巻一、426頁)

此頃記載すべきは亞國よりの信報にして尚いまた詳なるをしる事能はずといへとも亞國軍艦の数五百三十艘あり (巻一、427頁)

ここでは『日本貿易新聞』と同様に「亞國」がたくさん使われている。それに対して「米」が用いられているのは2例しかない。「米国」が1カ所見られるが、使用される頻度からいっても定着していたとは言えない。

英、佛、荷、米、四ヶ國のミニストル等 (巻一、359頁)

入津セル米國獵船ノルドライト (巻一、436頁)

2. 『海外新聞』と『萬國新聞紙』

上記の官板の外に、やがて民間紙も誕生した。日本最初の民間新聞は彦蔵の『海外新聞』で、発行は1864年(元治元)からである。この新聞は、欧米の国名を殆どカタカナで表記する特色が見られ、漢字表記はあまり多くない。数少ない例では、先の『漂流記』と同様に「亞國」が使われている。

もし亞國の浮浪の者ともメキシコの大統領方へ加勢いたしなむ (巻二、233頁)

軍艦を率ひて亞州へ敵せんこと、(巻二、233頁)

合衆國の内亂創りしより亞國双方の軍艦… (巻二、233頁)

『萬國新聞紙』は横浜在留の教僧ペーリー師の発行で、「邦字新聞紙の祖ともいふべきもの」である⁵⁸⁾。1867年(慶応3)から発行され翌年一旦姿を消したが、1869年(明治2)から再刊されている。この新聞の「広告」の部に「亞國」が多出する。

亞國蒸氣船「コロラド」に乘し横濱港より出帆し (巻二、281頁)

「サンフランシスコ」亞國の港名に趣き (巻二、281頁)

亞船よりは却て稍廉なるべし (巻二、287頁)

亞商即ち證金を奪ふて價物を與ざらんとす (巻二、292頁)

亞國の醫 (巻二、295頁)

亞醫^{ヘボン}郝文去歲九月より、支那上海に往きて和英の對譯辭書を編する。編寫已に脱藁して上木の成功近きに在り (巻二、301頁)

亞國「ヘッボン」の英和對譯辭書成就せり。簡便確實にして且鮮明なり。英學に志ある諸君ハ坐右に置かずんハあるべからず (巻二、333頁)

亞國より近頃得たる新聞は此度太平洋海飛脚船中新に造りたる「チャイナ」と云船の持來れり (巻二、366頁)

亞國蒸氣船… (卷二、404 頁)

このように、日本の対訳辞書に大きな影響を与えた『和英語林集成』の著者、アメリカ人 J. C. ヘボンが「亜国」人になっている。当時、民間新聞でも「亜」が多用されていたようである。

3. 慶応四年発行の新聞

慶応四年という年は、日本における近代新聞誕生の年として、新聞史上特筆すべき年であるとされている。この年発行の新聞に『中外新聞』『公私雑報』『内外新聞』『日々新聞』『江湖新聞』等がある。だが当時江戸で発行されていた新聞のほとんどは佐幕派に荷担するものであり、それに対抗して明治政府は書籍出版物を許可制とした。そのためこれらの新聞のほとんどが6月で消え去ったと言われている⁵⁹⁾。しかし大阪の勤王派新聞『内外新報』や横浜の居留地で米人ヴァン・リードが主宰した『横浜新報もしほくさ』は残っていった。これら佐幕派新聞と勤王派新聞には、アメリカ表記に顕著な特色がみられる。

江戸を中心とした佐幕派新聞のアメリカに関する記事を見ると、「亜」が多数用いられている。振り仮名が「アメリカ」となっているものもあれば、「あこく」とはっきり表記しているものも見られる。

當時横濱在留の軍船は六艘にして、亞船二なり (卷三、114 頁)

亞人も必ず打拂はるべき様子に見えたり (卷三、116 頁)

英國亞國等の公使は専ら催促の掛合中なり (卷三、219 頁)

米夷入港以來人情日々洋習に移り (卷三、233 頁)

米夷入港以來重義慷慨の士數萬人身を捨て (卷三、280 頁)

亞國役人其國の軍艦イロウ船の船將へ申通し (卷四、52 頁)

相愛する事 英 ^{エギリス} 亞 の如きハあらず (卷四、423 頁)

亞國捕鯨漁船北海に艇りて (卷五、60 頁)

亞米利加より日本までの里數 ^{あこく} 亞國の六丁一里にして (卷五、108 頁)

亞國に限らず各國ともに女形は女が爲るとぞ (卷五、117 頁)

このように江戸の新聞で「亜国」が使われていたのとは対称的に、関西では「米国」が使用されていたようである。1868年2月18日に明治政府は兵庫でアメリカ公使と「米國辨理公使の中立布告書」を調印したが、その正文には「米国」と書かれている。「米国」が正式文書に用いられるのは、この布告書からのことではないかと思われる⁶⁰⁾。

御門陛下と大君の間に戦闘の起これる趣公法ありしに因りて米國臣民等偏頗なき中立を固守する法を設けん事を欲し…

右中立を破るものは人船共米國政府の保護を失ひ米國と日本間の条約にて許されある正理を失ふへし

同じこの2月に『太政官日誌』の第1号が発行された。『太政官日誌』は公に布告され、これによって諸国裁判所や諸藩の留守居等を通じて、すべての人間に新政府の行政方針を広報し、

政策に従わせようとしたものである。中央政府の日誌として独特の価値を持っている。その第1号にも「米国」が見られる⁶¹⁾。

然ラバ明十五日十字ノ朝米國公使館ニ於テ再會シ各般ノ諸事件ヲ約定セン

新政府からは新聞も発行されており、『内外新聞』はその代表的なものである。尾佐竹猛による「解題」は次のように述べている⁶²⁾。

慶應四年に発行せられたる幾多の新聞は江戸発行のもの多く、編輯者も舊幕臣系統のものにて、論調は自然佐幕的となるの傾向あるに對し、京阪方面に於ては、新政府の主義政策を宣傳する爲め勤王派の新聞を発行したものであるが、文化進展の關係上、佐幕派のものは數に於て多く、勤王派のものは之に劣るのである。しかし、その少なきもの、内にて『内外新聞』はその有力なるものの一つである。内外新聞は勤王派の新聞としては、太政官日誌につぐ堂々たる新聞。毎號神戸の英字新聞の翻譯が主として掲載せられて居るから、いづれ明治政府に關係ある新知識連の手に成ったのであらう。

『内外新聞』には「米国」が見られ、その振り仮名ははっきり「ベイコク」とある。

^{アメリカ}米利堅艦 米國 第一閏四月十七日神戸新聞 (巻五、185 頁)

^{アメリカ}米國軍艦 第二閏四月二十四日神戸新聞 (巻五、192 頁)

米國コンシユル館 第三戊辰五月朔日神戸新聞 西洋第六月十日我國四月十九日 (巻五、198 頁)

^{アメリカ}先頃米國帆前商船 第四戊辰五月八日神戸新聞ノ譯 (巻五、202 頁)

^{ベイコク}米國ノ國旗ニ對シ不敬ニ當ル 第四戊辰五月八日神戸新聞ノ譯 (巻五、202 頁)

^{ベイコク}米國全權公使 第五戊辰五月十五日神戸新聞譯 (巻五、210 頁)

米國ノ豪勇 第六戊辰五月二十三日神戸新聞譯 (巻五、219 頁)

英米二國ノ兵ヲ以テ神戸ヲ固メシコト 第六戊辰五月二十三日神戸新聞譯 (巻五、219 頁)

米國飛脚船ノ着ニ依テ左ノ重大事件ヲ聞得タリ。合衆國大統領ジョンソン人名ハ勤務ノ過失アリテ放官サレシト 第七戊辰五月神戸新聞譯 (巻五、225 頁)

米國商船 第九神戸新聞譯 (巻五、239 頁)

米國 米人 第十戊辰八月 (巻五、240 頁)

『内外新聞』は第十七号まで発行されたが、タイトルの通り、当時の国内外の新聞の記事を翻訳した記事が殆どであった。一方『神戸新聞』は外字新聞として多くの人々に利用されていた。このように「米国」は翻訳語の形で現れたのである。勤王派たちは佐幕派と一線を画すために、わざとこの訳語を選んだのであろうか。

この当時、大阪では『各國新聞紙』が発行されている。英国人ウイセヒが編集し、慶應四年四月に第一号を出しているが、経営困難のためか創刊号が出たのみで、続かなかった。海外諸国の情報の紹介が主であるこの新聞にも「米国」が見られる。

英國ヨリ米國 迄海路千五百里ナリ (巻三、104 頁)

米國ニテ製作スル蒸氣ハ大底木船多シ (巻三、104 頁)

やがて勤王派の官軍が江戸に入って明治新政府となると、新聞の私刊禁止を布告すると同時に、江戸の全新聞紙の板木・摺留を没収し、発行禁止を命じたため、幕末新聞紙はほとんど姿を消してしまう。しかしそのため流言飛語が飛び交うようになり、明治2年には新聞が復刊で

きることになった。このときの新聞にはほとんど「米国」が使われている。先述の『萬國新聞紙』も、「亜」から「米」へと変わっている。1871年(明治4)発行の『新聞雑誌』では「米国」「米人」「米船」等が使われ、現在とほとんど変わらない。

抑先年米國に分れ國亂ありしき、是は全く込め人のあやまちにて(巻二、442頁)

米國と英國とハ元來兄弟に等しき國なり(巻二、449頁)

英米ノ新聞報告者(巻五、290頁)

米國ノ飛脚船ノ破船セシ所(巻五、294頁)

西米二國ノ商品ヲ掠奪スルコト無ル可ク八号(巻五、300頁)

アメリカ
米國ノ船破船セシニ(巻六、8頁)

『新聞雑誌』は名前から雑誌のように思われるが、当時の編集や発行状況から見て、新聞だと見てよい。このように、「亜国」から「米国」へと推移した過程には、明治維新の歴史が深く関わっていたことが分かる。江戸を中心とした佐幕派新聞が「亜国」を使っていたのに対し、京阪を根拠地としていた勤王派は「米国」を使っていた。彼等の勢力の消長に伴って、日本におけるアメリカの呼称も変化したといえるのである。

(3) 辞書における「米国」

「米国」が辞書に現れたのはだいぶ遅れたようである。1876年(明治9)イギリス人外交官アーネスト・サトウ(Ernest Satow)と石橋政方が共同で編集した『英和辞典』(“*An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language*”)に「米国」が載っている。漢字は出ていないが、以下のように読み方から「米国」であることが分かる。

America, n. Amerika; U.S. Of America, Gasshiu-koku; Beikoku

明治以前の日本で最も影響が大きかった辞書は、1862年(文久2)に江戸で刊行された『英和對譯袖珍辞書』(“*A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language*”)であるとされている。この辞書には巻末に英語による「略語の部」があり、そこに「U.S.A」や「America」が見られるが、本文中には「アメリカ」がみられず、「亞墨利加」が1箇所見られる。

Yankee, s. 亞墨利加人ヲ罵ル語

この辞書は1867年(慶応2)に増訂版が刊行され、それを底本として薩摩辞書やその他の海賊版などが作られたが、そこにも見られない。

先に述べたJ. C. ヘボンが編集した『和英語林集成』は九版まで重版されて、日本の辞書史上に占める位置は大きいと言える。その初版には「英和の部」に「America」の説明として、「Amerika」が見られるが、二版(1872年・明治6)には何故か見当たらない。1886年(明治19)の三版には詳しく書かれている。

和英の部：BEIKOKU, ベイコク, 米國, n. America

英和の部：America, n. Beikoku, Amerika

ヘボンの知識や交友関係から見ても、「亜国」といったアメリカの漢字表記のことは当然知っていたはずである。それを辞書に収録しなかったのは、おそらく当時の表記に混乱があった為だろうと思われる。また、初版と二版が上海で上梓されたためか、「和文の扉」には「美國平文先生編譯」となっている。三版は横浜で出版されたので、その「和文の扉」は「米國平文先生編」となっている⁶³⁾。

一方、中国から渡った「英華辞典」には「美国」が見られるが、これは影響を及さなかったようである。イギリス人宣教師ロブシャイドの『英華字典』（1866～69年）を井上哲次郎が校訂して1884年(明治17)に発行しているが、その中に、

America: n. 花旗國, 亞美利加
the United States: 合國, 大美國, 花旗國, 合衆國, 美國, 列國一統
American: 花旗國的, 花旗國人

とある。また1872年中国で発行された『英華學藝韻府』“*English and Chinese Dictionary*”は1888年(明治21)に矢田堀鴻によって挿訳が加えられ、『英華學藝詞林』の書名で刊行されている。

United States, (the). 美國. 合衆國. 聯合之邦

とある。

アーネスト・サトウと石橋政方の *An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language* は版を重ねて大きな影響を残している。ほかの辞書にも「米国」が現れ、この頃この表記がほぼ定着したと言える。

- 1884 英和字典 尺振八譯
米國 (USED IN WRITING AND PRINTING の部)
- 1885 英和雙解字典 棚橋一郎譯
米利堅合衆國 米國(解語略の部)
- 1888 漢英對照いろは辞典 高橋五郎
べい(名)米, こめ; (又アメリカの略に用ふ) Rice, America
べいこく米國(亞美利加國) America
めりけん米利堅あめりか合衆國米國花旗國
- 1889-91 言海 大槻文彦 べい(名)米利堅ノ略。「米國」「米人」。
- 1893 日本大辞書 山田美妙
べい{(米)}漢語、亞美利加ノ當テ字。米利堅ノ略[米國]

大修館の諸橋轍次著『大漢和辞典』にも、小学館の『日本国語大辞典』にも、アメリカについては詳しい説明が見られる。

- 1955 大漢和辞典 諸橋轍次著
米利堅メリケン アメリカ國をいふ。[清會典、總理各國事務門]凡有約之國十有六、曰、米利堅。一作亞墨理駕合衆國 米 國の名。アメリカ

べい 米(漢)亜米利加「アメリカ」、また「亜米利加合衆国」の略/日米、英米、欧米/南米、北米/遣米、親米、渡米/米貨、米語、米国、米州
 べいこく「米」はアメリカの当て字、「亜米利加」の略、アメリカの別称。
 メリケン[米利堅] ①アメリカ。アメリカ合衆国 ②アメリカ人

このように日本では遂に「米国」が定着し、「米」もその略で一般化された。ただ、『日本国語大辞典』に「米」は「亜米利加」の略とされているが、これまで述べてきたように、「亜米利加」より「米利堅」のほうが早くから見られ、その読み方の「メリケン」も幕末の日本人の脳裏に強く焼き付いていたと言える。そこで「米利堅」の頭文字をとって、今の略になったのではないかと考えられる。「亜米利加」の略としては、むしろ「亜」が一時広く利用され、定着の気配を呈するまでに勢いが強かった。それが後に「米」にとって変わられ、現在に至ったと言えよう。一方、明治開化期文学には、欧米諸国の事情や風俗をテーマにした作品が少なくないが、アメリカについては、「亜墨利加」、「亜米利加」、「米利堅」の表記のほかに、「亜墨理加」、「亞米理加」等も見られるが、略称「米」で米国を指す例は見られない⁶⁴。「米国」の成立には新聞の影響が大きかったようである。

5. おわりに

外国の認識はその国名から始まる。漢字文化圏では西洋諸国の国名を漢字で表記していたことが明らかである。しかしその漢字表記は現在日本と中国とで違いを見せている⁶⁵。

国名(カタカナ)	日本語の漢字表記	中国語の漢字表記
アメリカ	米国(米)	美国(美)
イギリス	英国(英)	英国(英)
ドイツ	独逸(独)	德国(德)
フランス	仏蘭西(仏)	法国(法)
イタリア	伊太利(伊)	意大利(意)
スペイン	西班牙(西)	西班牙(西)
ポルトガル	葡萄牙(葡)	葡萄牙(葡)
ロシア	露西亞(露)	俄羅斯(俄)
オランダ	和蘭(蘭)	荷蘭(荷)

しかしこれまで述べたように、実は日中両語の漢字表記はともに漢訳洋書の影響を強く受けている。特に後期漢訳洋書は現代の表記を決定し、それが時代の変化に従って、日本と中国の間で差を生み出したのである。このような側面から見ても、西洋人宣教師の近代中国及び日本の歴史における役割は無視できないと言えよう。一方、日本ではカタカナによる呼称が早くから定着していた。中には、「イギリス」のように俗称が一般化したものもある。

風説書や漂流記といった伝聞情報から、アメリカとの直接交渉まで、時代が下がるにつれて

「アメリカ」は州名から国名、さらに近代国家だと、その認識は次第に明確なものになっていった。発音の面から、「亜国」と「米国」とを比較して、亀井俊介は次のように述べている⁶⁶⁾。

メリケン、アメリカまたはアメリカンのアの音がよくききとれないところから、なまってつかわれた言葉である。だが、かんがえてみると、このなまった言葉の方が、America(n)の実感に近い趣もある。メの音にアクセントがある原語の調子は、アを抜くことによってかえて生きてくるし、カンよりもケンの方がやはり原音に近い。

「米国」の方がより言語の発音に近いという指摘は筆者も同感である。

漢字表記の方は「亜墨利加」、「亜米利加」、「米利堅」へ、更に「亜国」から「米国」へという過程を経て定着している。特に、佐幕派と勤皇派との力の消長を背景に、「亜国」から「米国」へと変化したことは注目される。江戸を中心とした新聞には「亜国」が多く使用されていたのに対し、関西を中心とした勤王派の新聞『内外新聞』などには、「米国」が多く見られている。新政府の下で、江戸の新聞が再開したときから、一斉に「米国」に変化したのである。「米国」をめぐる、明治維新の意味深い歴史の一部が潜んでいると言えよう。ここにも、当時のアメリカ認識、更に国際認識の変化が見られ、やがてこの変化が日本を急速な近代化へと導いたのであろう。

注：

- 1) 16世紀末(明の中葉)から18世紀20年代(清の雍正帝による布教禁止)にかけて、マテオ・リッチを代表としたイエズス会宣教師と中国人協力者によって著された著訳書のことをさす。天文、暦学、地理、数学、医学など、西欧の科学知識が紹介されている。なお、飛田良文先生はこれを「初期漢訳洋書」と呼んでいる(『西洋文化の移入と新漢語』『月刊国語教育』東京法令出版1986年9月号)。佐藤亨はその著『近世語彙の研究』(桜楓社、1983年)でこれを「初期洋学書」と呼んでいる。荒川清秀は『近代日中学術用語の形成と伝播』(白帝社、1997)でそれにならっている。
- 2) 宮城県図書館蔵「重要文化財」『坤輿萬國全圖』、臨川書店刊、1996年。
- 3) 守山閣叢書 史部『職方外紀』。
- 4) 『職方外紀』卷二。
- 5) 『職方外紀』卷四。
- 6) 景印文淵閣『四庫全書』地理十、驪江出版社、1987年。
- 7) 新井白石著、宮崎道生校注『新訂西洋紀聞』東洋文庫、1982年、8頁。
- 8) 荒川清秀『近代日中学術用語の形成と伝播』白帝社、1997年、67頁。
- 9) 『新訂西洋紀聞』29頁。
- 10) 同上、40頁。
- 11) 日蘭學會法政蘭學研究會編『和蘭風説書集成』(上)吉川弘文館、1979年、20頁。
- 12) 國書刊行會『通航一覽』(第六、1912年、巻252 諸厄利亞國部一、346頁)によると、元和二年(1616)には、既に「伊祇利須」と書かれていた。
- 13) 荒川清秀『近代日中学術用語の形成と伝播』白帝社、1997年、67頁。
- 14) 青史社復刻『訂正増譯采覽異言』、1979年、1169頁。
- 15) 本木正栄等編訳『諸厄利亞語林大成』雄書堂書店刊行本、1982年、62頁-854頁。
- 16) 藤林普山編『譯鍵』青史社復刻、1981年。
- 17) 渡邊華山は『西洋事情書』(1839)にアメリカを「亞墨利加」と表現している。日本思想大系55『渡邊華山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内』岩波書店、1971年、66頁。
- 18) 渡邊華山『慎機論』(1838)、前掲書66頁。
- 19) 19世紀の始めから日清戦争にかけて、ロバート・モリソンをはじめとしたプロテスタントの宣教師

たちによって著された著訳書のことをさす。飛田良文先生「西洋文化の移入と新漢語」にならう。
なお、佐藤亨は『近世語彙の研究』（桜楓社、1983年）でこれを「後期洋学書」と呼んでいる。

- 20) Morrison『華英字典』第三部、「英吉利國字語小引」『華英辭書集成』第6巻、ゆまに書房、1996年。
21) 『蛮語箋』の改正増補版である。森島中良の『類聚紅毛語譯』（寛政10年1799）は、ほとんど出版と同時に『蛮語箋』と改題されている。「附録」の「萬國地名箋」に「明人著ス所ノ地球圖説ノ譯字」を用いているから彼の用いた語彙の源流は、直接中国人の著作したものに拠っている証拠であると指摘されている。杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開 III—対訳語彙集および辞典の研究—』（早稲田大学出版部、1978年、527頁）。なお、『蛮語箋』（飛田良文先生所蔵）に出ているヨーロッパ主要国の国名は以下の通りである。

伊斯把泥亞 イスパニヤ
拂郎察 フランス
意太里亞 イタリア
波爾杜瓦爾 ポルトガル
諳入利亞 アンゲリヤ
北亞墨利加 イールアメリカ
南亞墨利加 ソイドアメリカ

- 22) 石山洋「箕作阮甫の地理学」、蘭学資料研究会編『箕作阮甫の研究』思文閣出版、1978年、242頁。
23) 箕作省吾の著となっているが、阮甫の援助を受けた可能性がある指摘されている、蘭学資料研究会編『箕作阮甫の研究』思文閣出版、1978年。
24) 「合衆国」の成立について、斎藤毅はその著『明治のことば』（講談社、1978年）で次のように推定している。「合衆国」という語は、マカオ在住の独人宣教師ギュツラフ（愛漢者、Karl Friedrich August Gutzlaff, 1803-51）らをはじめとする英米の対清交渉に活躍した中国語の達人である通訳官によって作られ、それがのちに、日米交渉のさいにも、唐通詞や蘭通詞や日本の漂流民らを介して、あるいは中国各地で刊行された新聞雑誌等を通して、幕府の外交担当者や蕃書調所の訳官たちに伝えられ、次第に、日本における、アメリカの正式の国号として定着するに至った（第三章「合衆国と合州国」、85頁）。
- 25) 斎藤毅『明治のことば』講談社、1978年。第三章を参照。
26) 『海国図志』の内容から収集した。
27) 同上、97-99頁。
28) ICU 図書館所蔵、對媚閣蔵『和刻瀛環志略』、8丁表。
29) 故宮博物院輯『清代外交史料 嘉慶朝』成文出版社、1968年、85頁。
30) Morrison『華英字典』第三部、141頁。
31) 梁廷枏『合省國説』卷一、1844年刻本、15丁表。
32) マイクロフィルム版『江戸幕府刊行物集成』リール113、雄松堂フィルム出版有限会社、1987年。
33) 池田皓編『漂流』『日本庶民生活資料集成』第五巻、三一書房、1968年、3頁。
34) 遠藤高環「時規物語」、前掲書、174頁。
35) 古賀謹一郎「蕃談」、前掲書、241-301頁。
36) ここに「米國」が見られるが、米の産地という意味で使われているのが分かる。同上、273頁。
37) 同上、240頁。
38) 川田維鶴撰「漂巽紀略」高知市民図書館、1986年（再版）。
39) 同上、25頁。
40) 吉田正譽「漂客談奇」、『日本庶民生活史料集成』第五巻、610頁。
41) 杉本つとむ『日本英語文化史の研究』八坂書房、1985年、151頁。
42) 彦蔵「漂流記」、國書刊行會『文明源流叢書』第三巻、1913年、151-179頁。
43) 野々上慶一編『文明開化繪錦集』垂元書房（1967年）、玉蘭齋貞秀著『横濱開港見聞誌』名著刊行會（1979年）、小西四郎『錦絵幕末明治の歴史1 黒船来航』講談社（1977年）等を参照。
44) 外務省編纂『日本外交年表並主要文書 1840-1945 上』日本國際連合協會、1955年。
45) 日米修好通商百年記念行事運営會編『万延元年遣米使節史料集成』（全7巻）風間書房、1961年6月。
46) 玉蟲誼「航米日録」、國書刊行會『文明源流叢書』第三巻、1913年。

- 47) 倉沢剛『幕末教育史の研究一』吉川弘文館、1983年、170頁。
 - 48) 慶応義塾編『福澤諭吉全集』第一巻、岩波書店、1958年。
 - 49) この節に出てくる資料は全て江戸幕府刊行物編集委員会編『江戸幕府刊行物集成』マイクロフィルム版、リール111、112による(雄松堂フィルム出版、1987年)。
 - 50) 官板中外新報、『江戸幕府刊行物集成』マイクロフィルム版、リール112。
 - 51) 明治文化研究会編『幕末明治新聞全集』第二巻、世界文庫、1961年、1頁。
 - 52) 官板海外新聞、同上。
 - 53) 官板玉石志林、同上。
 - 54) 達理堂蔵版複製、村上英俊『三語便覧』カルチャー出版社、1976年、凡例。
 - 55) 杉本つとむ、前掲書、151頁。
 - 56) 明治文化研究会編 前掲書、第一巻、7頁。
 - 57) 同上。
 - 58) 石井研堂は解題で「新聞紙の本使命を発揮したものは、本紙を以て鼻祖としなければならない」と高く評価している。明治文化研究会編、前掲書、第二巻、13頁。
 - 59) 春原昭彦『日本新聞通史』新泉社、1987年、17頁。
 - 60) 外務省編纂『日本外交年表並主要文書1840-1945 上』日本國際連合協會、1955年。
 - 61) 石井良助編『太政官日誌』第一巻、東京堂出版、1980年。
 - 62) 明治文化研究会編、前掲書、第五巻、13-14頁。
 - 63) J. C. ヘボン『和英語林集成』復刻版。初版、松村明・飛田良文解説、北辰1966年。二版、東洋文庫1970年。三版、松村明解説、講談社、1974年。
 - 64) 『明治開化期文學集(一)』を参照。『明治文學全集』1 筑摩書房、1966年。
 - 65) 表中の()はその略。
 - 66) 亀井俊介『メリケンからアメリカへ』東京大学出版会、1979年、「あとがき」を参照。
- * この論文を作成するにあたって、指導教授の飛田良文先生をはじめ、斯波義信教授、M. W. スティール教授、宮沢恵理子氏に多大なご指導、ご協力をいただいた。心から御礼を申し上げる。